

第41回名古屋春栄会
演目のあらかし

平成23年1月9日

名古屋春栄会事務局

目 次

翁（おきな）	1
老松（おいまつ）	3
羽衣（はごろも）	4
絃上（けんじょう）	5
舟弁慶（ふなべんけい）	6
七騎落（しちきおち）	7
頼政（よりまさ）	8
東北（とうぼく）	9
桜川（さくらがわ）	10
老松（おいまつ）	11
半部（はしとみ）	12
室君（むろぎみ）	13
海人（あま）	14
加茂（かも）	16
安宅（あたか）	17
難波（なにわ）	18
〔能のミ二知識	19〕

このリーフレットは、第41回名古屋春栄会の演目を解説したものです。
演目の記載順は、番組の順です。
詞章については、金春流の謡本から転載しました。

翁（おきな）

【作者】 不詳

【登場人物】 シテ：翁（面・翁）、狂言：千歳、狂言：三番叟

【概要】（素謡の部分…シテが退場するところまで）

翁は「能にして能にあらず」と言われています。演劇性を持たない、天下泰平、国土安全、五穀豊穡を祈願する儀式としての舞のみの能です。翁、千歳、三番叟の3人がそれぞれ別に舞を舞います。颯爽たる千歳の舞、荘重な翁の舞と続き、その後、翁は退場し、千歳と三番叟の問答の後、三番叟が「揉之段」と「鈴之段」とい2つの力強い舞を舞います。

【詞章】

シテ どうどうたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

シテ 所千代までおわしませ。

地謡 われらも千秋さむらおう。

シテ 鶴と亀との齡にて。

地謡 幸ひ心にまかせたり。

シテ どうどうたたりたたりら。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

千才 鳴るは瀧の水。鳴るは瀧の水。日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

千才 たえずとうたり。たえずとうたり。

<千才舞>

千才 所千代までおはしませ。われらも千秋さむらおう。鳴るは瀧の水。

日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

<千才舞>

シテ あげまきやとんどや。

地謡 よばかりやとんどや。

シテ ざしていたれども。

地謡 まいろうれんげじや。とんどや。

シテ 千早ふる。神のひこさの昔より。ひさしかれとぞよわい。

地謡 そよやりちや。とんどや。

シテ 千年の鶴は。万才楽と歌うたり。又万代の池の亀は。甲に三極を備えり。

天下泰平国土安穩。今日のご祈禱なり。ありわらや。なじよの翁ども。

地謡 あれはなじよの翁ども。そやいづくの。翁ども。

シテ そよや。

<翁舞>

シテ 千秋万才の。喜びの舞なれば。一舞まおう万才楽。

地謡 万才楽。

シテ 万才楽。

地謡 万才楽。

老松（おいまつ）

【分類】初番目物（脇能＝老神物） *真ノ序ノ舞

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：老人（面・小尉）、後シテ：老松の神（面・石王尉）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

都の西の方に住む梅津の某は、北野天満宮の夢のお告げを蒙り、筑紫国（福岡県）の安楽寺へ参詣することにします。はるばると旅をして、菅原道真の菩提寺である安楽寺へ着くと、老人と若い男がやって来て、梅と桜のことを述べ、花盛りの梅に垣を作ります。梅津の某は、彼等に言葉をかけ、有名な飛梅はどれかと問うと、神木であるから紅梅殿と崇めなさいとたしなめられ、同じく神木である老松についても教えられます。さらに梅津の某の頼みで、社殿の周辺の景色を述べ、松や梅が天神の末社として栄えていることを示し、中国では、梅は文学を好むので「好文木」といわれ、松は秦の始皇帝の雨やどりを助けたので「大夫」の位を授けられた故事などを教えたあと、神隠れします。

<中入>

おどろいた梅津の某は、供の者に土地の人を呼びにやらせ、その人から詳しく道真の事蹟や道真を慕って飛んできた梅、後を追ってきた松の話を聞きます。里人の勧めで梅津の某の一行は、松陰で旅寝をして神のお告げを待ちます。すると、老松の神霊が、紅梅殿に呼びかけながら登場し、のどかな春を祝って舞をまい、君の長寿を祝い、御代の永遠をことほぎます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

さす枝の。さす枝の。梢は若木の花の袖。これは老木の神松の。これは老木の神松の。千代に八千代に。さざれ石の。巖となりて。苔のむすまで。苔のむすまで。松竹。鶴鶴の。齡をさずくるこの君の。ゆくすえ守れと我が神託の。告を知らする。松風も梅も。久しき春こそ。めでたけれ。

羽衣（はごろも）

【分類】 三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊序ノ舞

【作者】 不詳

【主人公】 シテ：天人（面・増女）

【あらすじ】（今回の仕舞[キリ]の部分…下線部）

駿河国（静岡県）三保の松原に住む白龍という漁師が今日も釣にやって来ます。そして、のどかな浦の景色を眺めていると、いい匂いがしてきます。あたりを見廻すと、一本の松の木の枝に美しい衣がかかっています。そこで、家宝にでもしようと持って帰りかけると、一人の女性が現れて呼び止め、それは自分のものだから返してほしいと頼みます。その女性が天人であり、その衣が天の羽衣であることを聞かされた白龍は、そんなに珍しいものかと喜び、国の宝にしようと返そうとしません。天人は羽衣がなくては天に帰れないと、空を仰いで嘆き悲しみます。その姿があまりに哀れなので、白龍は、羽衣を戻すかわりに、天人の舞楽を見せてほしいと頼みます。天人は喜んで承知し、羽衣を着て月世界における天人の生活の面白さや、三保の松原の春景色をたたえた舞を舞いながら、天空へと上っていきます。

【詞章】（今回の仕舞[キリ]の部分の抜粋）

あずま遊びのかずかずに。あずま遊びのかずかずに。その名も月の。色人は。三五夜中の空にまた。満願真如の影となり。御願円満国土成就。七宝充滿の宝をふらし。国土にこれを施したもう。さるほどに。時移って。天の羽衣。浦風にたなびきたなびく。三保の松原浮き島が雲の。足高山や富士の高根。かすかになりて天つみ空の。霞にまぎれて失せにけり。

絃上（けんじょう）

【分類】四・五番目物（貴人物、略脇能） ＊早舞

【作者】不詳（金剛弥五郎？）

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉または三光尉）、
後シテ：村上天皇の霊（面・中将）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

時の太政大臣藤原師長は、天下に隠れもない琵琶の名手です。もはやわが国にはライバルはいないと思い、唐（中国）に渡ってさらにその奥義を窮めようと、従者を伴い、都を出て須磨の浦までやって来ます。そこで、一夜の宿を借りた塩屋の主の望みに応じて、師長が一曲弾いていると、にわかには村雨が降り来り、板庇を打ちます。すると老夫婦が、苫を取り出して板屋を葺いて調子を整えます。師長はその措置に驚き、音曲に嗜みのある者と見て、一曲を所望します。すると翁は琵琶、姥は琴によって越天楽を合奏します。師長はその神技に感じ、国内に自分より優れた弾き手はいないと思いがったことを深く恥じて、立ち去ろうとします。老夫婦はこれを引き止め、自分達は村上天皇と梨壺女御の霊であり、師長の入唐を止めるために現れたのだと述べて姿を消します。

<中入>

やがて村上天皇の霊が神々しい装束で現れ、龍神に命じて、竜宮に持ち去られた獅子丸の琵琶を取り寄せ、これを師長に下賜します。そして自らも、興に乗じて秘曲を奏で、舞を舞って昇天します。師長は、何よりの土産と名器をたずさえて都に戻ります。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

獅子には文殊やめさるらん。獅子には文殊やめさるらん。帝は飛行の車に乗じ。八大竜馬に引かれたまえば。師長も飛馬にむちをあげて。馬上に琵琶をたずさえて。馬上に琵琶をたずさえて。須磨の帰洛ぞ。ありがたき。

船弁慶（ふなべんけい）

【分類】 五番目物（怨霊物） *中ノ舞（前シテ）、舞働（後シテ）

【作者】 観世小次郎信光

【主人公】 前シテ：静御前（面・小面）、
後シテ：平知盛の怨霊（面・怪士〔あやかし〕）

【あらすじ】（独調〔クセ〕の部分…下線部）

源義経は、平家追討に武功を立てますが、戦が終わると、かえって兄頼朝から疑いをかけられ、追われる身となります。義経は、弁慶や従者と共に都を出、攝津国（兵庫県）大物浦から西国へ落ちようとしています。静御前も、義経を慕ってついて来ますが、弁慶は時節柄同行は似合わしくないから、都へ戻すように義経に進言し、了承を得ます。弁慶は静を訪ね、義経の意向を伝言しますが、静は弁慶の計らいであろうと思い、義経に逢って直接返事をするといいます。義経の宿に来た静は、直接帰京をいいわたされ、従わざるを得ず、泣き伏します。名残りの宴が開かれ、静は、義経の不運を嘆きつつ、別れの舞を舞います。やがて出発の時となり、涙ながらに一行を見送ります。

<中入>

弁慶は、出発をためらう義経を励まして、船頭に出発を命じます。船が海上に出ると、にわかに関風が変わり、激しい波が押し寄せて来ます。船頭は必死に船をあやつりますが、吹き荒れた海上に、西国で滅亡した平家一門の亡霊が現れます。中でも平知盛の怨霊は、自分が沈んだように、義経を海に沈めようと長刀を持って襲いかかって来ます。義経は少しも動ぜず戦いますが、弁慶は押し隔てて、数珠を揉んで祈ります。祈られた亡霊は、しだいに遠ざかり、ついに見えなくなります。

【詞章】（独調〔クセ〕の部分の抜粋）

然るに勾踐は。ふたたび世をとり、会稽の恥をすすぎしも陶朱功をなすとかや。されば越の臣下にて。政をみにまかせ。功名富たっとく。心の如くなるべきを。功なり名をとげて身しりぞくは。天の道と心得て。小船に掉さして五湖の遠島をたのしむ。かかる例しも有明の。月の都をふりすてゝ。西海の波濤におもむき御身の科のなきよしを。なげき給わば頼朝も。ついにはなびく青柳の。枝をつらぬる御契り。などかはくちし、はつべき。

七騎落（しちきおち）

【分類】四・二番目物（侍物） *男舞

【主人公】シテ：土肥実平（直面）

【作者】不詳

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

治承4（1180）年8月、石橋山の合戦に敗れた源頼朝は、他日を期して安房上総の方へ落ちのびようとしています。そして、一行の軍師格の土肥実平に、船の用意を命じます。ところが、いざ漕ぎ出そうとして船中を見ると、主従の人数が八人でした。頼朝は、祖父為義が九州へ落ちた時も八騎であり、父義朝が近江へ敗走した時も八騎であったことを思い出し、不吉の数だから、一人を降ろすように命じます。実平は、いずれも忠義の者ばかりで選びかねた末、最長老の岡崎義実を降ろそうとしますが、彼は承知しません。やむなく我が子遠平を下船させ、一行は親子の別れに同情しつつも、船を沖に進めます。遠ざかる陸を見ると、敵の数は多く、遠平は討死するに違いないと、実平は心ひそかに悲しみます。翌日、沖合で和田義盛が頼朝の船を捜し出し、声をかけてきます。実平は義盛の心を試すため、主君はいないと偽ります。すると、義盛はそれでは生きているかいないと、腹を切ろうとするので、これを止め、近くの浜辺に船を寄せて頼朝に対面させます。そこで、義盛は実平に向い、遠平は自分が助けて来たと言い、父子を引き合わせます。実平は夢かとばかり喜び、父子は抱き合います。そして一同は酒宴を催し、実平はすすめられて喜びの舞をまいます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

かくて時日をめぐらさず。かくて時日をめぐらさず。西国のつわもの馳せ参ずれば。ほどなくおん勢二十万騎になり給いつつ。たなごころにて治め給えるこの君の御代の。めでたきためしも実平正しき忠勤の道にいる。実平正しき。忠勤の道にいる。弓矢の名をこそあげにけれ。

頼政（よりまさ）

【分類】二番目物（修羅物）

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・三光尉）、後シテ：源頼政の霊（面・頼政）

【あらすじ】（独吟の部分…下線部）

諸国一軒の旅僧が、京都から奈良に向かう途中、宇治の里に着き、佳勝の地の景色に見とれ、この土地の人の来るのを待ちます。そこへ一人の老人が来合わせたので、僧は名所を尋ねます。老人は旅僧の求めに応じて、あたりの名所を教え、ついで平等院へと誘います。そして、ここは頼政が武運つたなく戦死したゆかりの地であると教えます。僧が合掌して回向すると、老人は喜び、ちょうど今日がその命日にあたり、自分こそその頼政の幽霊であると名乗って消え失せます。

<中入>

そのあと、宇治の里の人がやって来たので、旅僧は、彼から頼政の拳兵の理由や宇治橋の合戦の模様を聞きます。僧は、そぞろ哀れをもよおし、頼政のために読経し、仮寝をします。やがて、僧の夢の中に、法体の身に甲冑を帯びた老将が現れます。僧は頼政と認め、法華経を読誦しているので、成仏疑いないことを伝えます。頼政は、治承4年夏、拳兵した時の様から説き起こし、宇治に陣を構えた模様を語ります。そして、宇治川を挟んでの合戦、平家方300余騎が川を渡ってくる様子、踏み留まったの防戦と語りつぎます。しかし、敗色濃しと見た頼政は、平等院の芝の上に扇を打ち敷き、「埋れ木の 花咲くことも なかりしに 身のなる果ては 哀れなりけり」の辞世を詠じて自害します。その跡が、世にいう扇の芝であると述べ、僧に回向を乞うて、草の陰に消えてゆきます。

【詞章】（独吟の部分の抜粋）

かくて源平両家の兵。宇治川の南北の岸にうち望み。関の声矢叫びの音。波にたぐえておびたたし。味方には筒井の浄妙。一來法師。敵味方の目を驚かす。かくて平家は大勢。橋は引いたり水は高し。さすが難所の大河なれば。そうのう渡すべきようもなかつし所に。田原の又太郎。忠綱と名乗って。宇治川の先陣われなりと。名乗りもあえず。三百余騎。くつばみを揃え川水に。少しもためらわず。群れ居る群鳥の翼を並ぶる。羽音もかくやと白波に。ざっざっとうち入れて。浮きぬ沈みぬ渡しけり。

東北（とうぼく）

【分類】 三番目物（鬘物） *序ノ舞

【作者】 世阿弥

【主人公】 前シテ：都の女（面・小面）、後シテ：和泉式部の霊（面・小面）

【あらすじ】（仕舞[キリ]の部分…下線部）

東国より都へ上って来た旅僧が、東北院の和泉式部の住居跡を訪れます。折から花ざかりの一本の梅の木を見て、感じ入っていると、美しい一人の里女が現れて、話しかけてきます。そして、この梅は、今は「和泉式部」、「好文木」、「鶯宿梅」などさまざまに呼ばれているが、以前ここが上東門院の御所であった頃、和泉式部が植えて、「軒端の梅」と名付けたのだと、その由緒を語り、また、あの方丈は式部の寝所をそのまま残したものであると語ります。そして、花も、昔の主人である和泉式部を慕うかのように、年々に色も香も増して咲き続けているというので、旅僧が感心すると、自分こそ、この梅の主の和泉式部であると述べて、花の陰に消え失せます。

<中入>

旅僧は、門前の者からも和泉式部の物語を聞き、梅の木陰で夜もすがら読経します。すると、式部の霊が、ありし日の美しい上臈の姿で現れます。そして、昔、御堂関白藤原道長が、今あなたが読誦している法華経を高らかに誦しながら、この門前を通られるのを聞いて、「門の外 法の車の 音聞けば われも火宅を 出でにけるかな」と詠んだが、その功德により、死後、火宅の苦しみをのがれ、歌舞の菩薩になったと語ります。さらに和歌の徳や、東北院の霊地であることを讃え、美しい舞を舞って、やがて暇を告げて方丈に入ったかと思うと、僧の夢は覚めます。

【詞章】（仕舞[キリ]の部分の抜粋）

袖ふれて舞人の。かえすは小忌衣。春鶯囀という楽は。これ春の鶯。鶯宿梅はいかにや。これ鶯のやどりなり。好文木はさていかに。これ文を好む木なるべし。唐のみかどの御時は国に。文学さかんなれば。花の色もますます匂い常よりみちみち。梅風よもに薫ずなる。これまでなりや花は根に。鳥は古巢に帰るとて。方丈の灯を。火宅とや猶人はみん。こここそ花の台に。和泉式部がふしどよとて。方丈の室に入ると見えし。夢はさめにけり。見えつる夢はさめにけり。

桜川（さくらがわ）

【分類】四番目物（狂女物） ＊イロエ

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：桜子の母（面・曲見）、後シテ：桜子の母（面・曲見）

【あらすじ】（網ノ段の部分…下線部）

九州日向国（宮崎県）、桜の馬場の西に、母ひとり子ひとりの貧しい家がありました。その家の子、桜子は、東国方の人商人にわが身を売り、その代金と手紙を母に渡してくれと頼み、国を出ます。人商人が届けた手紙から桜子の身売りを知った母は、悲しみに心を乱し、氏神の木華開耶姫に我が子の無事を祈り、桜この行方を尋ねる旅に出ます。

<中入>

それから三年がたち、遠く常陸国（茨城県）の桜川はちょうど桜の季節です。桜子は磯辺寺に弟子入りしており、今日は師僧に誘われて、近隣の花の名所の桜川に花見にやって来ます。里人は、桜川の川面に散る花びらをすくって狂う女がいるから、この稚児に見せるとよいとすすめます。呼び出された狂女は、九州からはるばるこの東国まで、我が子を探してやって来たことを語り、失った子の名前も桜子、この川の名も桜川、何か因縁があるのだろうが、どうして春なのに我が子の桜子は咲き出でぬかと嘆きます。さらに桜を信仰する謂れや我が子の名前の由来、桜を詠じた歌などを語り、落花に誘われるように、桜子への思いを募らせて狂乱の極みとなります。僧は、これこそ稚児の母であると悟り、母子を引き合わせます。母は正気に戻って嬉し涙を流し、親子は連れ立って帰国します。

【詞章】（網ノ段の部分の抜粋）

あたら桜の。あたら桜の科は散るぞ怨みなる。花もうし風もつらし。散れば誘う。誘えば散る花かずら。かけてのみ眺めしは。名も青柳の糸桜。霞の間には。かば桜。雲と見しは。三吉野の。三吉野の。三吉野の。川淀滝つ波の。花をすくわばもし。国栖魚やかからまし。または桜魚と。聞くも懐しや。いずれも白妙の。花も桜も。雪も波も見ながらに。すくい集め持ちたれども。これは木木の花。まことはわが尋ぬる。桜子ぞ恋しき。わが桜子ぞ。恋しき。

老松（おいまつ）

【分類】初番目物（脇能＝老神物） *真ノ序ノ舞

【主人公】前シテ：老人（面・小尉）、後シテ：老松の神（面・石王尉）

【作者】世阿弥

【あらすじ】（独吟〔クセ〕の部分…下線部）

都の西の方に住む梅津の某は、北野天満宮の夢のお告げを蒙り、筑紫国（福岡県）の安楽寺へ参詣することにします。はるばると旅をして、菅原道真の菩提寺である安楽寺へ着くと、老人と若い男がやって来て、梅と桜のことを述べ、花盛りの梅に垣を作ります。梅津の某は、彼等に言葉をかけ、有名な飛梅はどれかと問うと、神木であるから紅梅殿と崇めなさいとたしなめられ、同じく神木である老松についても教えられます。さらに梅津の某の頼みで、社殿の周辺の景色を述べ、松や梅が天神の末社として栄えていることを示し、中国では、梅は文学を好むので「好文木」といわれ、松は秦の始皇帝の雨やどりを助けたので「大夫」の位を授けられた故事などを教えたあと、神隠れします。

<中入>

おどろいた梅津の某は、供の者に土地の人を呼びにやらせ、その人から詳しく道真の事蹟や道真を慕って飛んできた梅、後を追ってきた松の話を聞きます。里人の勧めで梅津の某の一行は、松陰で旅寝をして神のお告げを待ちます。すると、老松の神霊が、紅梅殿に呼びかけながら登場し、のどかな春を祝って舞をまい、君の長寿を祝い、御代の永遠をことほぎます。

【詞章】（独吟〔クセ〕の部分の抜粋）

げにや心なき。草木なりと申せども。かかる浮世の理をば。知るべし知るべし。諸木の中に松梅は。ことに天神の。ご自愛にて。紅梅殿も老松もみな末社と現じ。たまえり。さればこの二つの木は。わが朝よりもなお。漢家に徳を現わし。唐の帝のおん時は。国に文学さかんなれば。花の色を増し。匂い常より勝りたり。文学すたれば匂いもなく。その色も深からず。さてこそ文を好む。木なりけりとて梅をば。好文木とは付けられたれ。さて松を。太夫という事は。秦の始皇の御狩の時。天俄にかき曇り。大雨しきりに降りしかば。帝雨を。しのがんと。小松の陰に寄りたもう。この松にわかには大木となり。枝を垂れ葉を並べ。木の間透間をふさぎて。その雨を漏らさざりしかば。帝太夫という。爵を贈りたまひしより松を太夫と申すなり。かように名高き松梅の。花も千代までと。行く末久しみ垣守。守るべし守るべしや。神はここも同じ名の。天満つ空も紅の。花も松ももろともに。神さびて失せにけり跡。神さびて。失せにけり。

半部（はしとみ）

【分類】三番目物（鬘物） ＊序ノ舞

【作者】内藤藤左衛門

【主人公】前シテ：里の女（面・増）、後シテ：夕顔の女の霊（面・増）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

京の都の紫野雲林院の僧が、90日にわたる夏の修行も終わりが近づいただったので、修行の間に仏に供えた花々の供養を行います。すると、白い花が開いたかのように、どこからともなく一人の女が現れて、花を捧げます。僧が女に名を尋ねると、ただ夕顔の花と答えるだけで、その名を明かしません。僧がさらに問いただすと、五条あたりの者とだけ言って、活けられた花の陰に消え失せてしまいます。

<中入>

僧が不思議な思いをしていると、ちょうどそのあたりの者がやって来て、光源氏と夕顔の物語を聞かせ、その女性は夕顔の幽霊であろうと述べて、僧に五条あたりへ弔いに行くことを勧めます。僧が五条あたりを訪ねてみると、荒れ果てた一軒の家に、夕顔の花が咲いています。僧が、夕陽が落ち、月がさし込むこの家の風情を眺め、『源氏物語』昔を偲んでいると、半部を押し上げて、一人の女性が現れます。女は、光源氏と夕顔の花の縁で歌を取り交わし、契りを結んだ楽しい恋の思い出を物語り、舞を舞います。そして、夜明けを告げる鐘と共に僧に別れを告げ、また半部の中へ消えてしまいます。しかし、そのすべては僧の夢の中のことでした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

折りてこそ。それかとも見ぬ。たそかれに。ほのぼの見えし。花の夕顔。花の夕顔。
花の夕顔。終の宿りは知らせ申しつ。常には弔らい。おわしませと。木綿附の鳥の
音。鐘もしきりに。告げわたる東雲。あさまにもなりぬべき。明けぬ先にと夕顔の
宿り。明けぬ先にと夕顔の宿りの。また半部の内に入りて。そのまま夢とぞ。なり
にける。

室君（むろぎみ）

【分類】四番目物（夜神楽物・略初番目物） ＊神楽、中ノ舞

【作者】不詳

【主人公】シテ：韋提希夫人（面・増女）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

播州（兵庫県）室明神の神職が神事を執り行おうと、室津の遊女たちを神前に集ま
らせたところ、室君達は梅の香が匂う春の夜の興趣を歌いつつ、船に乗ってやって
来ます。神職の命により、棹の歌を歌い、神楽を奏していると、室明神が女体の姿
で現れます。そして、感涙に袖をぬらしていると、夜も明けはじめ、明神は空高く
昇っていくのでした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

玉のかんざし羅綾のたもと。風にたなびき瑞雲に乗り。所は室の。海なれや。山は
のぼりて上求菩提の機をすすめ。海はくんだりて下化衆生の相を現し五濁の水も。実
相無漏の大海となつて。花降り異香薫じつつ。相好まことに肝に銘じ。感涙袖をう
るほせば。はや明けゆくや春の夜の。はや明け方の雲にのりて。虚空にあがらせ。
給いけり。

海人（あま）

【分類】初・五番目物（略脇能物＝女菩薩物） ＊早舞

【作者】不詳

【主人公】前シテ：海人（面：曲見）、後シテ：龍女（面：泥眼）

【あらすじ】（玉ノ段の部分…下線部）

房前大臣（藤原房前）は讃岐国（香川県）の志度の浦で亡くなったという母の追善のため、従者と供人を伴って、はるばる志度の浦までやって来ます。すると、一人の海人が現れます。従者が、海人に水底に映る月を見たいので、梅松布〔みるめ〕を刈るように命ずると、海人は昔も、宝の珠を海底から取り上げるためにもぐったことがあると言い、昔、唐土から興福寺に三種の宝が贈られたが、そのうち面向不背の珠だけが、この浦の沖で龍宮に取られてしまった。藤原淡海公（藤原不比等）はそのことを深く惜しまれ、身をやつしてこの浦に下り、海人乙女と契りを交わし、その玉を取り返してくれるように頼んだこと、海人が淡海公の子をもうけ、その子が今の房前大臣であることを語ります。これを聞いた房前大臣が、それは自分のことだと名乗ると、海人は、我が子を淡海公の後継ぎにする約束と交換に、千尋の綱を腰に結わえ、海に潜り、見事に珠を取り返すものの、龍神の激しい抵抗にあい、自分の乳の下を掻き切って、そこに珠を隠し、流れ出る血潮に龍神がたじろぐうちに、息も絶え絶えになりながら海人は帰ってきたものの、息を引き取りましたと語り、自分こそ、その海人の亡霊であると明かし、海中に姿を消します。

<中入>

房前大臣は、浦の者からも珠取りの次第を聞き、亡き母の残した手紙を読み、十三回忌の追善供養を営みます。読経のうちに、亡霊は龍女の姿で現れ、法華経の功德で成仏できたと喜び、舞を力強く、美しく舞います。

【詞章】（玉ノ段の部分の抜粋）

その時人人力を添え。引きあげ給えと約束し。一つの利剣を。抜きもって。かの海底にとび入れば。空はひとつに雲の波。煙の波をしのぎつつ。海漫々とわけ入りて。直下とみれども底もなく。ほとりも知らぬ海底に。そも神変はいさ知らず。とり得ん事は不定なり。かくて龍宮にいたりて。宮中をみればその高さ。三十丈の玉塔に。かの玉をこめおき。香華を供え守護神に。八龍なみいたり。その外悪魚鰐の口。のがれがたしやわが命。さすが恩愛の。ふる里の方ぞ恋しき。あの波のあなたにぞ。我が子はあるらん。父大臣もおわすらん。さるにてもこのままに。別れはてなん悲しきよと。涙ぐみて立ちしが。又思い切りて。手を合わせ。なむや志渡寺の観音薩埵の。力を合わせてたび給えとて。大悲の利剣を額にあて。龍宮の中にとび入れば。左右へばっとぞのいたりける。そのひまに宝珠を盗みとって。逃げんとすれば。守護神追かく。かねてたくみし事なれば。持ちたる剣をとり直し。乳の下をかききり玉をおしこめ。剣を捨ててぞふしたりける。龍宮のならいに死人をいめば。辺りに

近づく悪龍なし。約束の縄を動かせば。人々喜び引きあげたりけり。玉は知らずあまびとは海上にうかみ。いでたり。

加茂（かも）

【分類】初番目物（脇能） ＊舞働

【作者】金春禅竹

【主人公】前シテ：水汲女（面・増女）、後シテ：別雷の神（面・大飛出）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

播州（兵庫県）の室の明神と都の加茂明神とは御一体であるというので、室の明神に使える神職が都へ上り、加茂の社に参詣します。すると、その川辺に新しい壇が築かれ、白木綿に白羽の矢が立ててあります。それを見て、不審に思い、ちょうどそこへ水を汲みにやって来た二人の女に尋ねます。女は「昔、この里に住んでいた秦の氏女が、朝夕この川の水を汲んで、神に手向けた。ある時、川上から白羽の矢が流れてきて水桶に止まったので、持ち帰って家の軒にさしておくと懐胎して男子を産んだ。この子と母、そして白羽の矢で示された別雷〔わけいかづち〕の神を加茂三社の神というのです」と、加茂三社の縁起を語ります。続いて、水を汲みながら川に因んだ歌をひき、その流れの趣を語り、やがて自分が神であることをほのめかして消え失せます。

<中入>

しばらくして、女体の御祖神〔みおやのしん〕が姿を現して舞をまい、続いて別雷の神が出現して、国土を守護する神徳を説き、猛々しい神威を示した後、御祖神は 糺の森へ、別雷の神は虚空へと飛び去っていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋です。）

風雨隨時の御空の雲居。風雨隨時の御空の雲居。別雷の雲霧をうがち。光稻妻の稲葉の露にも。宿る程だに鳴る雷の。雨を起して降りくる足音は。ほろほろ。ほろほろとどろとどろと踏みとどろかす。鳴神の鼓の。時もいたれば五穀成就も国土を守護し。治まる時にはこの神徳と。威光を現わしおわしませば。御祖の神は。糺の盛に。飛び去り飛び去り入らせたまえばな お立ちそうや雲霧を。別雷の。神も天路によじのぼり。神も天路によじのぼって。虚空にあがらせ給いけり。

安宅（あたか）

【分類】 四番目物（雑能＝現在物） ＊男舞

【作者】 観世小次郎信光

【主人公】 シテ：武蔵坊弁慶（直面〔ひためん＝素顔〕）

【あらすじ】（今回の仕舞[キリ]の部分…下線部）

平家討伐に最も勲功のあった源義経も、戦がすむと兄頼朝から追われる身となります。偽山伏に姿をかえ、奥州に落ちのびようとする義経主従を、頼朝は国々に新しく関所を設けて止めようとします。加賀国（石川県）安宅には、富樫某が下人と共に関を守っています。義経一行は、都を出てやっと安宅に着きますが、関のあることを聞いて、強力に様子を見にやらせると、なかなか用心がきびしいので、義経を強力に仕立て、南都東大寺建立勸進のための一行だといって通ろうとします。しかし関守が全員斬殺するというので、それでは仕方がない討たれようと、殊勝そうに最後の勤行をしますが、山伏を殺せば天罰が当たると威嚇するので、関守は少しひるみ、勸進帳を読めといいます。弁慶がもちあわせた巻物を勸進帳といつわって読み上げ、一度は通過を許されますが、義経の姿を見とがめられ追求を受けます。しかし、弁慶の機転と豪勇で首尾よく、その場を逃れることができます。関を通過して、ほっと一息ついているところへ、先刻の関守が後難を恐れ、非礼を詫びるため酒をもって後を追ひ、一同にふるまいます。酒宴をなっても弁慶は油断せず、力強い舞を見せ、関守に暇を告げ、一行に先を急がせます。

【詞章】（今回の仕舞[キリ]の部分の抜粋）

鳴るは滝の水。日は照るとも絶えずとうたり絶えずとうたりとくとき立てや。手束弓の。心許すな関守の人人。暇申してさらばよとて。笈をおっ取り肩にうちかけ。虎の尾を踏み、毒蛇の口を逃れたる心ちして。陸奥の国へぞ、くだりける。

難波（なにわ）

【分類】初番目物（脇能） ＊楽

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：王仁（面・悪尉）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

廷臣が従者と共に熊野から京の都に帰る途中、難波に立ち寄ります。すると杉箒を持った老翁が連れの男と共に現れ、天下泰平の春を詠いながら、梅の木陰を掃き清めます。廷臣が老人たちに梅の木のいわれを尋ねると、老翁は難波津の歌、仁徳帝の慈愛、難波の都の平和と繁栄について語り、自分は仁徳帝の即位を推進した百済国の王仁であると名乗り、舞楽を舞うことを約して立ち去ります。

<中入>

難波の春の夜に木華開耶姫と王仁が現れて名乗ります。そして木華開耶姫が梅の花を詠じて舞を舞います。続いて王仁が難波を祝福して舞楽を舞います。舞楽のうちの古の聖賢をたたえ、治世を祝福します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

あら面白の音楽や。あら面白の音楽や。時の調子にかたどりて。春鶯囀の楽をば。春風ともろともに。花を散らしてどうど打つ。秋風楽はいかにや。秋の風もろともに。波を響かしどうど打つ。万歳楽は。よろず打つ。青海波とは青海の。波立て打つは。採桑老。抜頭の曲は。返り打つ。入り日を招き返す手に。入り日を招き返す手に。今の太鼓は波なれば。寄りては打ち、返りては打つ。この音楽に引かれて。聖人御代にまた出で。天下を守り治むる。天下を守り治むる。万歳楽ぞめでたき。万歳楽ぞめでたき。

能のミニ知識

★能の分類

五番立て…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のものを実効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといえます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

○三番目物(鬘[かつら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

★能の楽器

囃子方[はやしかた]…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

笛(能管):竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

小鼓:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

大鼓:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓: 台に据えて、二本のバチで打ちます。

★略式の演能

素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるもの。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡う。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態。

独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するもの。演者は紋付袴姿。

連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するもの。演者は紋付袴姿。

仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞う(通常5分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞う。仕舞扇を用いるが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いない。シテ一人で演じるのが普通だが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキー人、ツレと子方で演じるものもある。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされる。

舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うもの。平均して10~20分程度の長さになる。長刀や杖などの手道具は用いるが、作り物(大道具)は省略する。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となったが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされている。

袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるもの。

半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるもの。

独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもの。

一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するもの。

一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合がある。

素囃子[すばやし]

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるもの。

番囃子[ばんばやし]

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるもの。

★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも早く、颯爽と舞う舞です。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。
雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。

中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。

「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。

精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。

「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。

働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>